

今後の取り組みと展望

初修外国語教育部

新沼雅代

私の専門は現代中国語学で、博士論文では語用論的前提を切り口に否定詞及び否定表現の選択メカニズムについて述べた。専門科目としての中国語の初歩、或いは現代中国語学の初歩がそのまま教養科目の中国語に相当するという訳もなく、教養科目としての中国語の在り方を自分なりに模索してきた。専任として勤務を始めた 2011 年から 2013 年までに実施した教育方法の実践例は以下である。

1. 音と発音表記法のピンインに特化した演習 (H23、H24)
2. 中国語検定対策の演習 (H24)
3. 中国語によるスキットの脚本作成。(H25)
4. 音声認識アプリを用いた発音の自己確認・調整指導。(H25 春)
5. 副教材作成：音節分解シート、口腔内図、単語カード、ピンインつづり方ルール (H23,H24)
6. 大教室・過大クラス対応型授業の授業デザイン及び教材作成 (H23)
7. 漢字と意味に特化した中国語演習。デジタル辞書ツールの使用促進。(H25 春)
8. 講義支援システム「Jenzabar」を利用した授業運営。欠席学生へのフォロー。(H25)
9. 授業アンケート (H23 秋、H24 秋) ※FD アンケート以外で実施。結果を翌年の授業運営に反映。

通常の授業以外での取り組みは以下である。

10. 中国での実践的中国語力の育成 (各年夏休み)
11. 中国語 SS・SV プログラム (H23,H24) ※JASSO による
12. 中国語ショート・ステイプログラム (H25) ※本学予算による
13. 中国語予備履修システムのプレ導入 (H25 春)
14. 中国語予備履修システムの本格的導入 (H25 秋)
15. 履修相談窓口の設置 (H25)
16. 中国語研究会 (H24 秋)
17. 中国サークル、中国語トークタイム活動の支援 (H25 秋)
18. 履修学生の第一希望データに基づく次年度時間割作成 (H25 秋)

以上を踏まえた今後の取り組みと展望は以下である。

私の調査によると、中国語演習履修者のうち 114 名中 73 名が実習から演習になると内

容のレベルが上がると感じている（拙稿 2012）¹。これは、1年生の時に学習する内容がバラバラであることが原因のひとつだと考えられる。この問題の対応として、統一シラバスの導入や日本中国語教育学会が示す学習指導ガイドライン等を参考にし、本学の中国語教育における基準を整備していく予定である。

本学の中国語を履修する学生の多くは、英語の学習経験からか、多くの学習方略を持っている（拙稿 2013）。保有する学習方略をどの程度中国語学習に用いているかは未調査ではあるが、英語学習に関する学習方略を中国語学習に応用していると仮定して、多くの場合、自分の用いている学習方略が中国語の学習において効果的かどうかを、半期 15 回の授業の中で検証する機会があまりないのではないかと思う。今後、授業では学習方略自体の指導や学習方略を高めたり修正したりする積極的介入に行い、さらに、学習方略と課題等をリンクさせ、努力が結果につながるようにし、学生の自己効力感を高める工夫を行っていく。

中国語は、2013 年度に引き続き、予備履修登録システムにより、学生のクラス分けを行う（春学期と秋学期の 2 回）。全学の WEB 履修登録に先立ち、学生から中国語の履修希望を提出させ、学生の希望をできる限り尊重し、かつ過大クラスの発生を防ぎ、クラス規模を適正に維持する。クラス規模をある程度の人数に抑えることで、担当教員はさまざまな教室内活動を行いやすくなる。また、2014 年春学期の予備履修登録で得られる、学生の第一希望の集中傾向のデータを、翌年度の時間割の配置にフィードバックしている（2013 年度のデータは 2014 年度の時間割にできる限り反映している。）

中国語履修者は初修外国語の中では多いが、履修者の全員が内発的動機付けにより選択しているとは言い難い。内発的動機付けと外発的動機付けは連続体であるので、授業を受けるうちに調整が行われ得る。私の調査によると学習が進むにつれ多くの学生は中国語学習が負担に感じていくようである。本学の中国語を履修する 1 年生のうち 187 名の 73%（137 名）が「中国語ができる」は「中国語が話せる」ことだと回答している（拙稿 2013）。多くの学生が中国語を「話せる」ようになることを最終的なイメージとして持っていたり、「話せるようになりたい」と考えたり（すなわち自己決定）することと、日々の授業とが大きくずれているため、学生の動機づけを阻害している面があると私は考える。今後、授業では、学生の習得観および動機づけに配慮した授業内活動を行うことが、教養教育科目としての中国語では効果的だと考え、今後授業改善を進めていく。

中国語の集中授業および中国研修については、研修先、研修内容、研修時期、派遣学生への事前・事後指導など再検討する予定である。

¹ 「活動報告」参照。引用文献について以下同じ。